

バクティ(帰依信仰) 文学が形成される場、それを囲む思想的・文学的な伝統

—『ラーマヤナ』の16世紀後半ヒンディー語版
『ラーム・チャリト・マーナス (ラーマの行いの湖)』の事例を中心に—

坂田貞二

1 目的と方法

この報告は、ヒンディー語によってバクティ（帰依信仰）文学が形成される場、それを囲む思想的・文学的な伝統を検証することを目指す。検証の事例として、16世紀後半に成った『ラーム・チャリト・マーナス（ラーマの行いの湖）』をとりあげる。

2 時代と地域の状況を、思想、言語・文学、政治について見渡す

バクティは、最高の人格神に、肉親に対するような愛の情感を込めながらも絶対的に帰依する思想・実践である。それは7世紀ころの南インドに起こり、しだいに北に伝わり広まった。北インドでは遅れて展開し、その思想と実践を主題とする文学作品が15-16世紀にヒンディー語で編まれるようになった。

バクティの思想と実践を主題とする文学作品がヒンディー語で編まれようとしていた地域と時期は、政治的にはムガル朝のフマール・ユーン（在位1530-1540、55-56）とアクバル（在位1556-1605）の統治時代にあたり、諸勢力が興亡していた。文学を表現する言語では、サンスクリット語やプラークリット語など古典的なものと、古典から近代諸語に移行する段階のアパブランシャ語、それに新たに形成されつつあったヒンディー語・ベンガル語などの近代諸語が並用されていた。文学を創る人と享ける人はそこで、それぞれの意図・目的により心を表現する言語を選んでいった。近代諸語による文学はこのころ、揺籃期から成熟期に入ろうとしていた（McGregor 45）。

そのころの思想的な伝統と状況を見ると、シヴァ神の妃の性力（シャクティ）崇拜と後期密教を包摂した呪術的な実修法タントリズム；暮らしの場で重要な牛、聖河ガンガー、聖地ワーラーナシーなどの動物と自然の崇拜；神々が神像の形で礼拝され、客人のように穀物や灯火などの供養を享けるプージャーが民間で行われていた。それらを採りいれつつ、最高的人格神に敬愛の念を抱き絶対的に帰依するバクティの思想と実践が形成された。

文学では16世紀に、至高の愛“pem”を求めて苦行する貴公子のロマンス『パドマーワト（蓮華姫物語）』がジャーエスイーにより編まれ、ヴィシュヌ神の化身クリシュナへの讃歌がスールダースにより詠われ、同じヴィシュヌ神の化身ラーマをめぐる『ラーマの行いの湖』がトゥルスイーダースにより編まれた。これらは当時のヒンディー語の諸方言を基盤とし、ときに古典的な言語・テーマと民間伝承を織りこむ。

政治的・思想的・言語的にこのような転換期にあった16世紀の北インドでは、文学が創られ享受される場にも大きな変動が生じていた。宮廷や諸宗派の寺院・礼拝所の勢力が低下して、古典的な言語での創作者の拠り所が弱体化してきた。一方で家業を営みながら思索する「俗人」、流浪乞食する出家、小さな庵で暮らす行者、あるいは地方宮廷・豪族、寺院・僧院を巡って庇護を求める文人が、それぞれの暮らしの場で詠い語るなかから、近代諸語の多様な方言で文学を創出しようと試みていた。そこではまた、新たな教派・教団が興ってきて、しだいに思想と文学に方向と拠り所を提供するようになる。

3 『ラーマの行いの湖』の形成過程を、作品の抄訳と先行研究で検証

『ラーマの行いの湖』は、貧しいバラモンの家に生まれたトゥルスイーダースが流浪しながら1574年に着手した全7編の作品である。

トゥルスイーダースは先行のラーマ物語のうち、ヴァールミーキ編とされ3世紀ころに現形をとった叙事詩『ラーマーヤナ』、15-16世紀にヴェーダーンタ哲学の立場でサンスクリット語により編まれた『アディヤートマ・ラーマーヤナ』、その少しあとにサンスクリット語で編まれた『アーナンド・ラーマーヤナ』などを参照した。

そのうえでトゥルスイーダースは、つぎの諸点で新たな創造を試みた。これらに言及する部分を、作品から抄出・試訳する。また、その部

分に言及する先行研究も示す。

1 幾多の文学的伝統を参照して、この物語を編むことについて

古譚・ヴェーダ・教典が認め

『ラーマヤナ』などに述べられしことを基に、

トゥルスィーダースは自らの心の平安を願い

ラーマの物語りをここに記す（1. 頌7）。

古譚や『ラーマヤナ』などとされているのは、『バーガヴァタ・プラーナ』、ヴァールーキの『ラーマヤナ』、作者不詳の『アディヤートマ・ラーマヤナ』などである（Lutgendorf 7）。

2 民の言葉ヒンディー語でこの作品を書くことについて

詩心なくラーマへの敬愛もなき人に この詩は笑いとばされよう。

古典語ならぬ民の言の葉で 学なきわれが書くものなれば（1.9.2）。

この部分は作品と作者を控え目に語っているように見えなくもないが、じつはこの言は、「詩心とラーマへの敬愛の念のある人には、学なきわれが民の言葉で綴ったこの物語りでも訴えるものを持つ」との自負を述べていると解せられる（McGregor 112）。

3 シヴァ神を讃える者こそがラーマ信仰の道を進みうとする

合掌してみなに申す 大事なことをもう一つ、

シヴァ神を讃えぬ者は われラーマの親愛を得ること叶わず（7.45）。

シヴァ神を讃えてはじめてわれラーマの信愛を得られると述べ、先行し当時も盛行していたシヴァ神信仰をヴィシュヌ神の化身たるラーマへの信仰に包摂しようとの意図が読みとれる（Lutgendorf 10）。

4 人の自然な気持ちを重視する（婚礼まえにたがいの姿を見たラーマとスィーターの心）

王女スィーターの麗しき姿に 王子ラーマは言葉さえなし。

神が創れる美の至宝 現世に顕れたる王女スィーター（3.230.3）。

鹿や鳥や樹木を見たし かく言いつつ王女スィーター

ラーマ王子のお姿を拝し 敬と愛の念が高まる（3.234）。

この作品全体に男女・親子の情愛を細やかに描写する傾向がみられる。婚礼まえにラーマとスィーターがたがいに惹かれたとの叙述は8世紀以

来のラーマ物語にあったが、16世紀初頭の『アーナンド・ラーマヤナ』はそれを詳述している (Bulcke 353)。

5 完全調和世界の確立

汝は浄火に包まれて そこでその身を守るべし。

幻影をここに残しおれ 羅刹をわれが撃ちほろぼすまで (3.24.1)。

麗しくして慎ましき 妃スィーター背の君のお傍で。

慈愛に満ちたる神ラーマに 尽くしつ日々を過ごしおる (7.24.2)。

このように、ラーヴァナに攫われるスィーターを幻影にしておくという伏線と、その結果スィーター自身は無垢であるから生涯をラーマと幸せに暮らせたとしているのは、トゥルスィーダースが『アディヤートマ・ラーマヤナ』の着想を採りいれたからである (Lutgendorf 10)。

4 まとめ —『ラーマの行いの湖』は、先行・並行の思想・信仰と文学伝統を参照しながら、民の言葉でラーマの物語りをトゥルスィーダースが再編成し創造—

16世紀後半に編まれたこのラーマ物語りは、先行・並行するシヴァ神への信仰を包摂してヴィシュヌ神の化身ラーマへの信仰を重視する。そのために民の言葉で平明に説く。民の世界に近づくために人間の情愛を重んじ、また一方でスィーター妃を無垢に保つことで時代の奔流に悩む民の心に平安をもたらそうとした。

こうしてトゥルスィーダースは、時代の要請を勘案して「新たなラーマ物語り」を創造した。この物語りはまた、北インド各地の屋外で秋の夜二十日くらいにわたって行われるラーム・リーラー（ラーマ劇）を介して民の親しむところとなり、ヒンディー語による帰依信仰文学を確立する途を拓くことになった。

テキストと参考文献

Bulcke, Camil. *Rāmkaṭhā* 3rd ed., Prayāg: Hindī Paṛiṣad Prakāśan, 1971.

Lutgendorf, Philip. *The Life of a Text-Performing the Rāmcaritmānas of Tulsidas*, Oxford: University

of California Press, 1991.

McGregor, Ronald Stuart. *Hindi Literature from Its Beginnings to the Nineteenth Century*,
Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1984.

Poddār, Hanumānprasād (ed., comm.). *Rām-carit-mānas* 12th ed., Gorakhpur: Gītā Pres, 1961.

さかた ていじ ●拓殖大学名誉教授